

---

# 寿命一年戦記

フーカ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

寿命一年戦記

### 【Nコード】

N6292U

### 【作者名】

フーカ

### 【あらすじ】

決して読んではいけない本があった。

その本を読んだ者は、一年以内に死ぬ。

助かる道は只一つ。読んではいけない本【読死本】全5巻を集める事。

読死本から一年間、特殊能力を授かった者達が、己の命を守る為に戦う物語が始まる。

## 大地の少女と空翔る青年

### プロローグ

#### 【SIN SINDOU】

ごめんね、信君

「アヤカっ！」

さようなら

窓辺から光が射し込み、薄暗い部屋の中で埃が輝きを持って舞う。信と呼ばれた青年の手の中で一人の女性が眠りにつく。

「アヤ　っ！」

その刹那、女性の体が　消滅した。

「…………え？」

信は啞然として自分の両手を見つめる。そして　。

「俺、何してたんだ？　あれ？　なんで俺、泣いてるんだよ……訳わからん」

信は涙を拭い辺りを見回す。此处が信の部屋である事は間違いない。

しかし、今まで何をしていたのか記憶がなかった。

「ん？」

信は足元に転がっている一冊の銀色の表紙の本を見つける。

信はその本を拾い上げ何気なくページを開いた。

### 【Foreword】

貴方の余命はあと一年となりました。

この本【読死本】第二巻を手にとって頂きありがとうございます。  
読死本は読んで字の如く、読めば死ぬ本です。ですがご安心下さい。  
猶予は一年間あります。

読死本のルールに従い目標を達成出来た場合に限り、貴方の命は  
助かります。

しっかりと読死本に目を通し、熟読し、自分の命をお守り下さい。

【It is a rule of the book to do  
ie when reading】

ルールを守り、明るい未来を手に入れましょう。

【1】本を読んでから一年以内に残りの読死本四冊を手に入れま  
しょう。

それが唯一死から逃れる方法です。

【2】残りの四冊はそれぞれ白の書（第一巻）黄の書（第三巻）  
黒の書（第四巻）金の書（第五巻）となります。

【3】

【4】それぞれの読死本には特殊能力が備わっています。

【5】読死本の持ち主（以後マスターと呼ぶ）が存在している間他者が読んでも真つ白な本にしか見えない。

【6】読死本はマスターがいない状態で手に入れなければならない。持ち主不在の読死本を集めなければならない。

【7】24：00～1：00の1時間は読死本はただの本と化す。その為能力は使えなくなる。

【8】読死本は他マスターの居場所を探知する能力を有している。

【9】読死本の破棄は不可能。

【Postscript】

それでは、命をかけたゲームスタートです。

第一章 大地の少女と空翔る青年

【YUKI KISARAGI】

「はあっはあっ」

丸い月が自己を主張する真夜中。

多くのマンションや一軒家が密集する住宅街で、黒い艶やかなツインテールの髪を揺らしながら一人の少女が誰かから逃げるように走っていた。少女の名は如月 ユキ。如月の背後からは複数の足音、暗闇で姿は見えない。

「もう、しつこいわね！」

如月は逃げる事を辞めた。足音の方向へと向き直り、一冊の黄色い表紙の本を取り出す。如月は暗闇を見つめる。暗闇から人の輪郭が、そして姿が現れた。

「そこまでだ、糞ガキ！」

暗闇から現れた漆黒の兵装をした男達。

その男達のリーダー格と思われる一人が声を荒げる。

男達の手には、ライフルが握られている。

たった一人の少女に大の男が五人、ライフルを少女に向けて構えていた。

「お前の命も終わりだな、糞ガキ！」

「……いいわよ、相手してあげる」

睨み合う両者、地を照らす満月に黒い雲がかかった刹那、五発の銃声が鳴り響いた。

五つの金色の弾丸が如月に向かって空気を裂き奔る。その軌道、全てが如月にとっての致命傷。

その距離あわずか一メートル。

このままでは、あと零コンマ一秒にも満たず如月は絶命するだろう。

だが！ その弾丸、如月に命中せず。一体どういう事か。

如月の足元から如月を守る大きな壁となつて大量の土が盛り上がつていた。

弾丸は全てその土に飲み込まれ、失速した。

男達はその現実離れた光景に金縛りにあつたかのように動きを止める。

その隙、如月は見逃さない。

「飲み込めっ！」

如月のその一言に壁となつていた大量の土が再び蠢き、男達に覆いかぶさるように襲い掛かる。

「う、うわあっ」

砂の高波に男達は飲み込まれた。否、リーダー格の男だけなんとか逃れていた。

「糞ガキっ！ 我々国家軍に逆らつてただで済むと思っているのかっ！」

黒尽くめの男達は国の正式な兵士であつた。

「うるさいわねっ！ こっちは命が懸かつてんのよっ！」

如月が叫ぶ。すると三度土がうねり、リーダー格の男を今度こそ飲み込んだ。

「はあ……はあ……もう、疲れたわよ」

如月は肩を上下に大きく動かしながら呼吸をし、その場からよろよろと立ち去ろうとした。だが、すぐに足を止める事になる。

如月の前に二人の男が立ちふさがっていた。

一人は短髪のまだ若く見える青年、もう一人は三十代後半ぐらいだと思われる、長い白髪の男だった。

如月は二人の男の軍服に付いている紋章を見て凍りつく。

その紋章、国家軍の中でも選りすぐりの選ばれたエリート兵士、たったの十人の「一級兵士」にのみ与えられるモノだった。

「しかも、もう片方は……」

二人のうち若い方は一級兵士、そしてもう一人は「特級兵士」の紋章。

国家軍でたった一人しか存在しない、英雄兵。一師団を一人で壊滅させた伝説を持つ。

「すごいねえー！　それが不思議な能力を持つ本の力か！　政府が欲しがるのもわかるわー。ねえ、キリヤ先輩？」

「……」

よく喋る一級兵士とキリヤと呼ばれた寡黙な特級兵士。

如月は再び本を開き、戦闘態勢に入る。

「あれー？　お嬢ちゃん、俺ら相手にやるつもり？　マジで！？　ありえねー

俺らはそこで倒れてる一般兵とは次元が違うんだぜ？



止めとけ止めとけ、大人しく本を渡すのが吉ってもんだ」

一級兵士はうんうんと頷きながら、如月に歩み寄っていく。だが、如月は本を渡すつもりなど毛頭ない。眼光鋭く一級兵士を射抜き、攻撃の呪文を言い放った。

「撃ち抜けっ！」

巨大な土の塊が弾丸となって一級兵士に向かって跳ぶ。

「あらら」

一級兵士はやれやれと言った表情で背中に装着していた鞘から自分の背丈はある程の巨大な剣を取り出し。

「あーら、よっこいしょっと！」

軽々と砂を薙ぐ。土の弾丸は集結力を失い、重力に逆らう事なくパラパラと落ちた。

「嘘……」

今度は如月が啞然とする番だった。一級兵士は剣を鞘に納めると如月の肩を軽く叩き

「安心しろよ、命までは取らないからさ」

と本を如月から取り上げる。だが、如月にとって本を失う事は死に等しい。

「さて、キリヤ先輩帰りましょうかー」

一級兵士が振り向き様に声を掛ける。

「あれ？」

そこにキリヤと呼ばれた特級兵士はいなかった。

すぐに一級兵士は如月の方へと視線を戻す。

そこには、今にも剣を如月に向けて振り下ろそうとしているキリヤの姿があつた。

「ちよつと待つたあつ！」

地面を力強く蹴り出し、風の如き速さで

キリヤと如月の間に入り込みキリヤの剣を己の剣で防いだ。

金属と金属が激しく衝突し、火花が散り、低く籠った金属音が響き渡る。

「あつぶねえっ！」

一級兵士は両手で剣を構え、なんとか防ぐ。

対するキリヤは片手で剣を振り落としている。

にも関わらず、その衝撃はあまりにも重い。

「……何をしている、カタナ」

キリヤが初めて口を開く。その声は低くその瞳は何の情も抱いていない冷たい眼差しだった。

「何も殺す事ないっしょキリヤ先輩！ 無駄な殺生を俺は好まない

「！」  
「……」

キリヤは無言で剣を納めた。  
カタナと呼ばれた一級兵士は、ほっと胸を撫で下ろす。が、その刹那。

「がはっ！」

カタナのみぞおちにキリヤの蹴りが入る。カタナは体内のモノを吐き出し、蹲る。

キリヤは、動く事の出来なくなったカタナの手から離れた読死本を拾い上げると、  
腰を抜かしたただ怯えている如月の方へと向かっていく。

「あ……いや……来ないで……」

如月には、キリヤが死神に見えた。自分の死を実感する。  
死神はその鎌で確実に如月の首を撥ねようとしていた。  
死の恐怖に耐え切れず、強く目を瞑る如月。  
どうせ死ぬのなら痛みもなく一瞬で。そう願っていた。

「……」

しかし、いくら待っても何も変化は起きない。如月がおそろおそろ目を見開くと。

「え？」

眼前に広がる　空。如月は今、宙高く空に存在していた。何が始まっているのか全く理解できずに呆然とする如月の横に、同じく宙に浮いている青年が一人。

その青年、宙であぐらを掻き腕を組み、何やら考え事をしている様子であった。

「だ、誰よっ！　あんたっ！　っていうか、これはどういうことっ！？

さっきまでいた特級兵士は！？　私の本はっ！？」

如月は不可解な現状を、突然現れたその青年に矢継ぎ早に問い質す。  
すると、青年はゆっくりと口を開いた。

「あー……、俺の名前は新藤　信。君と同じ読死本の所持者」  
「なっ！？」

如月は驚愕する。それもその筈、如月は自分の命を守る為に、同じ読死本の所有者をずっと探し続けてきたのだから。

「んでー、俺の本の能力で今空にいる。特級兵士からは逃げた。戦っても勝てる訳ないしなあ。ああ、それと逃げるついでに君の本も返してもらったよ」  
「んなっ！？」

如月は顎が外れるのではないか、と言う程に口をあぐりと開けて驚く。  
キリヤから逃げるだけでも奇跡だというのに、キリヤから本すらも奪った。

如月にとって、今日の前にいる青年は脅威以外の何者でもなかった。

「あ、あんた……その本、どうするつもりよ」

如月の読死本。それは同じ読死本所有者にとっては

喉から手が出る程欲しいモノ。全ての読死本を集めなければ待つて  
いるのは、

死のみ。それをわかっていたからこそ、次の信の行動に呆気に取ら  
れる他なかった。

「ほら、返すよ」

信は如月に向けて読死本を投げた。弧を描いて本は如月の手の元  
へ。

「え？ いい……の？」

「無いと困るだろ？ それに、この読死本のルール、理解できてる  
と思うけどさ」

信は神妙な顔つきで言う。

【6】読死本はマスターがいない状態で手に入れなければならない。  
持ち主不在の読死本を集めなければならない。

「つまり、所有者の存在する読死本を自分のモノにするには、  
所有者が読死するのを待つか

『所有者を殺して所有者が存在してない状態にしなければならな  
い』

「ってことなんだよな」

自分の命の為に他人の命を犠牲にしなければならない。

それがこの読死本のルールの要。

そして、信には他を犠牲にして己が生き延びるという考えは、出来なかった。

ただ、自分の死を甘んじて受けるつもりも全くなかった。

「見つけたんだよ」

「え？」

信は己の読死本を開き、ルールが記載されたページのある箇所を指差しながら言った。

「誰も犠牲にせず、全員が生き延びる方法を」

## 地球人、異世界へ

信は己の読死本を開き、ルールが記載されたページのある箇所を指差しながら言った。

「見つけたんだよ。誰も犠牲にせず、全員が生き延びる方法を」

信が指したページを如月は覗き込んで見る。だが、如月から見たらそれはただの真っ白なページでしかなかった。

【5】読死本の持ち主（以後マスターと呼ぶ）が存在している間、他者が読んでも真っ白な本にしか見えない。

如月はルールの一つを思い出し、自分の本を開く。

「ルールの何番目？」

「えーと……、7番目だな」

【7】24：00～1：00の1時間は読死本はただの本と化す。その為能力は使えなくなる。

「……これが誰も犠牲にせず生き延びる方法と何の関係があるのよ」

このルールからは、能力者としてのデメリットしか如月には感じ取る事が出来なかった。しかし、信は余裕の笑みを浮かべて言い放つ。

「ただの本になるって事は、破棄出来るって事だ」

信の会心のドヤ顔が炸裂する。が、如月は無表情で答えた。

「……いや、ルールの最後の項目に破棄は出来ないってあるわよ」

如月がツツコミを入れるが、それでもまだ信は余裕の表情で言葉を並べる。

「【読死本】の破棄は不可能と書いてある。つまり24時から1時間の間の1時間は【ただの本】になる訳だから破棄は可能なんだっ！」

本を右手の甲で叩き熱弁する信。だが、如月の顔は晴れない。如月は信の自信満々の態度をぶち壊す一言を告げる。

「ルールの一番最初、読みなさいよ」

「ん？ ……あ」

【1】本を読んでから一年以内に残りの読死本四冊を手に入れましょう。それが唯一死から逃れる方法です。

「唯一死から逃れる方法と書いてあるでしょ。破棄してもきつと呪いは解けないわ」

それに如月はただの本になる一時間の間に色々と試している。ほんの少しページを破ってみたり、文字を多少書き込んでみたり等。だが、全て無能時間帯を過ぎると元通りに復元された。きつと燃やして灰にしたとしても元に復元されるだろうと考えていた。

「……いやあ、参ったな。ははは……ははは」  
「はあ……」



深く溜息を吐く如月。ほんの少しでも期待してしまった事を後悔する。

「ところで、あんたはあとタイムリミットはどれくらいなの？ 私はまだ11ヶ月と10日あるけれど」

読死本の最後のページには、所有者の命が尽きるまでのタイムリミットが秒数までリアルタイムで表示されている。本に印字されている文字が刻一刻と変化していく様子は奇妙であり、読死本の不可思議さを象徴していた。

「俺は10ヶ月と3日だな」

お互いにまだ余裕がある事にほんの少し安堵する。時間は多ければ多い程良い。

冷たい風が二人の頬を撫でる。雲よりも高い上空で、月の光に当てられながら会話をする二人の様は、異様でもあり神秘的でもあった。

「そろそろ降ろしてくれない？ 此处は寒いわ」

「ああ、悪い」

信が本を開き呪文を唱えると、二人はゆっくりと地上へと降り立った。辺りに人の気配はない。静寂が街を包んでいる。

「そういえば、私の名前乗ってなかったわね。私は如月 ユキ。本の件は礼を言うわ。取り返してくれてありがとう」

「ああ、そんな事は気にすんなよユキ」

爽やかに答える信だったが、如月は信の言葉にひっかかる。

「……いきなり呼び捨てってどういう神経してんのよ、あんた」

「え、駄目か？ でも俺、ちゃん付けしたりするの苦手なんだよなあ」

「さん付けしないさいよっ！」

すかさずつつこむ如月だったが、信はあっけらかんとした顔で

「お前どうみても俺より年下だろ？ さん付けなんてお断りだ」

はつきりと言い切る。信は19歳、それに対して如月は16歳。年下の如月に「さん」付けする事は、信のプライドが許さなかった。

「あのねえ、私は」

「それより、俺と一緒に行動しようぜ。仲間が多い方が色々と有利だしさ」

如月の言葉を遮り、信は言う。信は、まだ全員が生き残る方法を諦めてはいない。必ず何か方法がある筈。その為には、まず全ての読死本とその所持者を集める事が最優先だと考えていた。また、如月もやつと出会えた同じ読死本を持つ能力者と今ここで対立するよりも、協力する方が効率的だと考える。

「わかったわ。一時的に仲間になってあげる。けれど、忘れないで。読死本のルールでは、私達は必ずいつか本の奪い合い……殺し合いをしなければならぬ時が来るって事をね」

たった一年間の命の猶予と自分の命の為に他人の命を奪わなければならぬこの非情なゲームに、甘ったれた思考など持つ訳にはい

かなかった。人を殺す覚悟がなければならない。自分を殺す覚悟がなければならない。他人を信じてはならない。

「いや、だから全員助けるから心配すんなって」

「あんたの案はさつき駄目になったばかりでしょうがっ！」

現実を見ず、理想ばかりを語る信に苛立ちを覚える。けれど、そのおかげで如月の本は返ってきた。この先利用していくならこのままの方が都合が良いかもしれない。そう考えた如月はこれ以上信を責める事はしないと決めた。

「あ、そういえば一つあんたに聞きたい事があったのよ」  
「なんだ？」

如月は本を開きルールの3番目、黒く塗りつぶされ読めなくなっている部分を見ながら訊いた。

「私の本、3番目のルールの所が塗りつぶされているのよ。だから、教えてもらえない？ 3番目がどんなルールなのか」

読死本を持つ者にとって、ルールは最も重要な事。空白のルールのせいで、知らずにルールを破り死に至るなんて事がないとも限らず、如月は死に怯える毎日を送っていた。けれど、その毎日と同じ読死本を持つ協力者が出来たとなれば話は別。しかし。

「なんだ、ユキのモカ。俺のモカ」

「……そう」

信の返答に如月は思案する。もしも全ての読死本に同じルールの塗りつぶしがあった場合、読死本の製作者が意図的に空白にしたか、

全ての読死本を集める事に成功した人物がなんらかの理由で削除したか。前者の場合、この読死本集めの難易度を上げる目的の可能性が高い。では、後者の場合はどうか。

「……それはないか、そもそも」

読死本は、外部からの全ての要因を受け付けない。火で炙ろうが、水に濡らそうが、なんの変化も見せない。読死本のページに何かを書き込もうとしても、外部要因を受け付けない読死本にはシミ一つ付ける事は不可能だった。その為、製作者以外の塗りぶつしは不可能と如月は考える。

「おい、何一人でぶつぶつ言ってるんだよ。取り敢えずこの場から離れるぞー。さっきの二人組にまた見つかったらやっかいだからな」  
「あ、待ちなさいよ」

二人が現在位置する場所は、国家軍本拠地からそう遠くない街「プリマ」。如月の提案により、プリマより西にある世界の情報の発信源「インフォマ」へと向かう事にした。

【S A T O U   A K A N E】

「あゝあ、地球滅びねーかな……」

平日の真昼間から学校にも行かずに、小石を川に投げ入れながら佐藤 朱音は呟いた。退屈な日常、退屈な時間、退屈な世界。朱音はこんな世界など滅びてしまえばいいのにと常々思っていた。

「あーつまんね」

もう一度小石を川に投げ入れる。川には大きな波紋が広がっていく。この世界が退屈なのは、朱音が全てなんでも出来る天才であったから。

偏差値80を越え、全国模試で一位を獲得。運動神経もスバ抜けており、何をやらせても全てトップクラスの成績を収めていた。だからこそ、朱音にとっては周囲の人間が低レベルに見え、なんの張り合いもなく退屈だった。

「おい、君」

不意に朱音は背後から声を掛けられる。朱音が振り向くとそこには、警察官が立っていた。

「君、こんな時間に学校にも行かず何をしているんだい？」

「やっべ」と朱音は警察官から逃げる為に地を蹴り走り出す。

「あつ！ 待ちなさい！」

警察官は自転車に乗って追いかけてくる。だが、差は縮まるどころかどんどん広がっていく。朱音は自分の通う高校の女子陸上部で実力を買われ、1年生にして短距離走のエースになったとして有名だった。その逃げ足の速さに自転車といえども追いつく事は敵わない。

「はあ……はあ……。つたく、めんどくせえな」

警察官を撒いた事を確認すると朱音は近くの公園のベンチに腰を下ろした。

「……あー、空飛びてえなあ」

空を見上げれば、雲ひとつない青々とした空がどこまでも広がっている。この空を自由に飛びまわれたら、どんなに清々しいだろうかと考える。

異世界の住人よ。告げる

「あ？」

突然の声。朱音は辺りを確認してみるが、人影は見当たらない。

「なんだ、気のせいかな!?」

ぐにやりと朱音の視界が曲がりくねる。

「なん……だ……?」

視界がだんだんと白けていく。そして。

汝の運命は我が元に、我が命運は汝の手に。黒の書に従い、  
応えよ

朱音の意識は途絶えた。

## 召喚する者される者

国家軍本拠地「ペイズ」。そこから東に広がる大森林「ボス」。ボスには、多くの獣や盗賊が住み着き、一流の冒険者でもない限り乗り物も使用せず足を踏み入れる者はいない。そんな危険地帯に名もなき一つの洞窟がある。

水の滴る音とコウモリの鳴き声だけが支配する世界。中は冷たい風が緩やかに流れ、所々に周囲を照らすロウソクの火が備え付けられている。大人が一人やつと通れるような細い道を過ぎると広い間に出る。洞窟の最深部にして、読死本第四巻【黒の書】のマスター、クインツエの住処であった。

クインツエは男にしてはあまりにも華奢で白い肌をしている。その白い肌を隠すように黒いマントで身を包む。銀髪の髪を掻きながらクインツエは地面に魔方陣を描いていく。

「え、え」と……これで本当にいいのかな。で、でもやるしかないんだよね……うう、なんで僕がこんな目に……」

クインツエは魔方陣を描き終わると、魔方陣の外にて【黒の書】を開き呪文を唱え始める。クインツエの周囲が黒い光を放ち始める。

「異世界の住人よ、告げる。

汝の運命は我が元に、我が命運は汝の手に。

黒の書に従い、応えよ」

魔方陣からも黒い光の柱が湧き上がり、その柱はほんの数秒で消え去った。

【黒の書】の特殊能力。それは異世界から一人、召喚出来る能力。ただし、どこの世界の誰が召喚されるかは、ランダム。召喚された者は、様々な強化を与えられる。あらゆる言語の習得や自動変換、ダメージ自然治癒、痛みの消失、その他身体的能力の大幅な強化等。それ故に、クインツエは大柄で屈強な戦士が召喚される事を願っていたのだが……。

「な、なんてこった……」

魔方阵に召喚された者を見て、クインツエは頭を抱える。白い肌、長い黒髪、華奢で小柄な体。魔方阵の上で眠る地球から召喚された美少女。佐藤 朱音。

「もう僕は終わりだあ！　こんな女の子一人じゃ生き延びるなんて無理だよー！」

召喚出来る者はたったの一人であり一度切り。黒の書のマスターであり、召喚者であるクインツエには、なんの戦闘能力も備わっていない。五冊ある読死本の特殊能力の中で唯一、自己に能力を授ける事のない黒の書。頼れるのは、召喚された者のみ。

「ん……」

召喚された朱音が目を覚ます。クインツエは初めて召喚した異世界の者に少し恐怖を覚え、物影に隠れて様子を見る。朱音は起き上がると辺りを窺う。

「何処だ此処は？　あー……意味わかんねー」



可愛らしい見た目とは裏腹に朱音の吐く言葉は、汚い。クインツエはとにかくこの召喚した少女と共に生き延びるしかないのだと悟り、物陰から朱音の前へ姿を現した。

「クツクツク……ようこそ、我が世界へ異界の者よ」

「あ？ 誰だお前？」

クインツエは召喚した者として、召喚された者に舐められてはならない、主従関係をはっきりと最初に知らしめなければならぬと、貫禄ある偉大な人間を想像し演じる。

「口の利き方には気を付けるが良い。私はお前をこの世界に召喚したマスターなのだからな」

「召喚？ 何厨二病みたいな事言ってるんだよ、おっさん」

「お、おっさんとはなんだっ！ ぼ……、私はまだ32歳だぞ」

「あははっ、やっぱりおっさんじゃん」

朱音はケラケラと笑う。早くもクインツエのメツキが剥がれ始める。このままではまずいと、クインツエは演技を続ける。

「私を怒らせない方が良い。死ぬ事になるぞ……」

「うつわあ、完全な厨二病だ。32歳で厨二病って痛すぎるよおっさん、あははっ」

「黙れっ！ 死にたいかつ！」

そのクインツエの怒声に、朱音の笑い声が止み、笑顔が消える。朱音は格闘経験も豊富であり、そこらの大人の男相手でも負けない自信があった。一步、また一步とクインツエとの距離を縮めていく。

「な、なんだ……。や、やるのかっ！ や、やめておけ、お前なん

かでは私には……、ぼ、暴力は良くないと思うんだ」

後ずさるクインツエ。恐怖に怯え、足は震えて足取りもままならない。朱音は無表情でじわりじわりと追い詰め、クインツエは背後の壁によって逃げ場を失う。朱音は優しく微笑むと、拳を振り上げた。

「おらあっ!」

「ひいっ!」

朱音の拳撃が飛ぶ。クインツエの顔、数ミリ横に拳がすれ違い硬い岩の壁に拳がめり込む。

「うお!? おおっ!?!」

驚愕したのは、クインツエではなく拳を繰り出した朱音本人だった。まるでプリンに拳を突っ込んだような脆い壁の感触。拳に痛みは全くなく、もちろん岩の壁が柔らかいなんて事もない。全ては【黒の書】の特殊能力である、召喚された者への強化によるものだった。

「なあなあ、これどうなってんの!? すげーんだけど!」

朱音はテンションを上げ、クインツエに訊くが

「あ、しまった」

クインツエは泡を噴いて気絶していた。

その後、朱音の往復ビンタによって目を覚ましたクインツエは、

朱音からマシンガンのように質問を浴びせられ、事細かに状況を説明した。

「という訳でして、一年以内に読死本を5巻全部集めないと僕も朱音さんもこの世界からおさらばなんです……」

低姿勢で17歳も年下の朱音にさん付けするクインツエ。すでに主従関係は決定していた。朱音は腕と足を組み、椅子に座りながらクインツエの話を聞いていた。元の世界 地球での生活に退屈していた朱音は、この話にとても興味が湧き上がっていた。朱音は屈託のない笑顔を浮かべると、椅子から立ち上がりクインツエの肩に腕を回す。

「面白い夢だな。お前名前は？」

「いえ、これは夢なんかではなく現実でして……。それと、僕はクインツエです」

朱音は頬を抓り痛みがない事を確認すると、これは間違いなく自分の夢であると決定付ける。現実には現実でしかなく、異世界だとか召喚なんてものは御伽噺の中だけで現実に起こりえるなんて事は、未熟な脳を持った人間だけが見る妄想だと考えていた。だから現実には退屈だと。

「呼びづらい名前だな。クインでいいな」

「えっと……はい……なんでも」

「よし、クイン。此处は私の夢の中だ。つまり私の思い通りになる。所謂無敵つてやつだ。厨二っぽい感じでいいじゃないか」

「いや、だから夢ではなくて……それとさつきから厨二って言葉使ってますが、どういう意味ですか？」

召喚された際に言葉が通じるように、あらゆる言語が朱音には備わり自動的に日本語からこの世界の言葉へ、そしてこの世界の言葉から日本語へと翻訳されるのだが、この世界にない単語を翻訳する事までは不可能だった。

「厨二つてのはだなあ」

「しっ！ 誰か来ます！」

朱音が厨二を説明しようとした途端、洞窟内に複数の足音が響いてきた。クインツェはすぐさま物陰に隠れるが、朱音は堂々と椅子に座ったまま動かない。クインツェが隠れるように指示を出すか聞く耳を全く持たない。夢だと思っている朱音にとって、怖いものなど一つもなかった。

複数の足音は徐々に近づき、コウモリ達が洞窟の外へと飛び去っていく。細い道を通って、広間へと現れた複数の人影。その姿を確認した時、クインツェはもう終わりだと悟った。クインツェが見た人影、それは国家軍の兵士達であった。しかもその中の一人には、国家軍に十人しか存在しない選ばれし一級兵士の紋章を付けた者がいた。

「構えろ」

広間に現れた途端、猫背で痩せ細ったつり目の、青いリーゼントと両手の鉤爪が特徴の一級兵士は他の兵に命令する。兵士達は一斉に銃を朱音に向ける。その数、六人。銃を向けられても朱音は動揺する様を見せずに、頬杖を突いてリーダー格の男を見据えながら話し掛ける。

「あのさー、いきなり失礼すぎるだろ。あんたら何者？」

この世界に來たばかりの朱音は國家軍の存在など知らない。また、一級兵士の恐ろしさも。

「撃てっ！」

一級兵士は朱音の質問に答える事なく、言い放った。

六発の弾丸が合図と共に放たれた。空を切り裂き、銀色の鉄の塊が熱を持って朱音に襲い掛かる。朱音はまさかすぐに撃たれるとは予想しておらず、身動きを取る事が出来ない。弾丸は全て朱音に命中する。寸前に止まり落下する。朱音の体の周囲には目には見えない防壁が存在する。弾丸程度では、貫く事は不可能。これもまた読死本四巻、【黒の書】の恩恵であつた。

兵士達はざわめく。目の前の銃が効かない相手に恐怖を覚える。一人を除いて。

「へえー、それが読死本とかいうものの力って訳かあ？　なるほどねえ、確かにすげーわ」

猫背の一級兵士　クルデルタは、鉤爪を構えながら感心する。朱音は椅子から立ち上がり、そのまま椅子をクルデルタに向かって投げつける。それをクルデルタは鉤爪で軽く切り裂く。

「突然発砲するとか、マジでびびったんだけど！？　こんな洞窟内で、めっちゃ音響くわっ！」

さすがの防壁も音波まで防ぐ事は出来なかった。少し頭に來た朱音は、腕をぶんぶん振り回し軽く全員ぶっ倒す事に決めた。

「一級兵士であり、8番手であるこのクルデルタ様とやろうってかあ？　良いねえ、生きが良くて。刻みがいいがあるさうだ」

クルデルタの紋章には、国家への功績度を表す数字の8が入っている。一級兵士には、1～10までの番号が割り振られており、1から順に国家に貢献した者の順番を示す。朱音はクルデルタの言葉を聞いて、笑う事が我慢出来ないといった様子で口を開く。

「ププツ！　い、一級兵士？　な、なんだその厨二ネーミング、プツッ！　は、腹痛い……、国家までもが厨二病かよ。プフツッ！」

言葉の意味は理解出来なかったが、馬鹿にされているという事だけは理解出来たクルデルタの表情が段々と鬼のような形相に変化していく。

「……てめえ、むかつくよ」  
「奇遇だなあ、私もだ」

二人は同時に地面を蹴りだし接近する。一般兵達は手を出す事が出来ず、またクインツェは物陰でぶるぶると震えていた。

対面する朱音とクルデルタ。クルデルタの鉤爪が朱音の顔面目掛けて走る。だが、朱音にはその鉤爪がスローのように見える。頭を軽く右に振りギリギリの所で避けると同時に、上半身を左に捻って全力の右ボディーブローを放つ。その力は凄まじく、乗用車が100kmで壁に衝突した時に等しい程の衝撃がクルデルタを襲った。

クルデルタは声を洩らす暇もなく、軽々と吹っ飛び壁に強く叩き付けられる。一般兵士達がすかさずクルデルタの元へ駆け寄る。

「ぐっ……ゴホッ！」

普通の人間であれば、即死の攻撃を受けてもクルデルタは生きていた。だが、そのダメージは凄まじく口から血を吐き出す。内臓が完全にイカれてしまっていた。

「て、てめえ……覚えていろよ……」

クルデルタは兵士達に支えられ退散する。朱音はそんなクルデルタを追う事はせず、目を強く瞑って物陰で震えているクインツエの元へ向かう。

「いつまで怯えてんだ、お前は」

「ひいつ！……あ、あれ？ 兵士達は？」

クインツエは辺りをきよきよと窺いながらも、物陰から出る。朱音が軽く倒してやった事を告げるとクインツエは目を丸くして驚いた。

「あ、あの一級兵士を軽く倒すなんて……ははっ、これは生き残れるかもしれないっ！ あ、朱音さんっ！ これからも宜しくお願いしますっ！」

クインツエは気が付くとこの洞窟にいて、無造作に置いてあった読死本を読んでしまい、更には洞窟の外はボスの森が広がり、多くの獣が徘徊し、逃げ出す事も敵わず途方にくれていた。ずっと不幸続きだったクインツエにようやく希望の光が見えた。

「で、どうすんだ？ 他の読死本とやらを待った奴らを倒して

奪えばいいのか」

「いえ、五冊集めさえ出来れば、このルールを利用してなんとか出来すよ」

クインツェは【黒の書】のルール記載のページを開き、ある部分を指し示す。

そこには、第二巻【銀の書】第三巻【黄の書】には記載されていなかった、3番目のルールが記載されていた。



## 仕える者

国家軍本拠地『ペイズ』。世界の秩序と平和を守る為に、約16万4千人もの兵士が日々活動している。国家軍は16万4千人の兵士の頂点に立つ英雄兵「キリヤ」を筆頭に、16万4千人の中から選ばれた10名の一級兵士、1000名からなる二級兵士、一万人からなる三級兵士、そしてそれらを支える一般兵士で成り立っている。

現在、国家軍は政府から重大な任務を受けている。それは、読死本のありとあらゆる情報の収集と、読死本全巻の収集である。しかし、キリヤは政府からの情報を元に読死本「黄の書」を持つ者を追い詰めたが、取り逃がすという大失態を犯してしまった。

その大失態について詳しく聞く為に、国家軍を統制する国防省の使者が応接間にてキリヤと対面していた。

「君程の実力を持つ者が、何故たった一人の少女を逃してしまったのか。上の連中はキリヤ君がわざと逃がしたのではないか。と、疑っているものでね。詳しい事情を聞かせてくれないか」

冷房の効いた部屋であるにも関わらず、醜く肥えた体をした使者は額から流れ出る脂汗をハンカチで拭いながら、キリヤに問う。

「読死本能力はやっかいなモノでして、一人相手であればどうにかなりましたが、途中でもう一人読死本を持った青年が現れ、私人では手に負えず逃がす結果となりました」

「ほう……つまり、この近辺に二冊の読死本があるという事だね。これは朗報だな。わかった、多くの功績を残した君だ。信じようで

はないか。引き続き読死本の収集任務に就きたまえ」

「はっ！」

使者はソファーから立ち上がり、扉へと向かう。そんな使者を見るキリヤの表情は苛立ちに満ちていた。使者は扉のドアノブに手を掛け、キリヤに振り向く。すぐさまキリヤは表情を戻す。

「それと今までは政府と国家軍内部のみの秘密としてきたが、今後は全世界に読死本の存在を知らしめ、読死本収集を懸賞金付きで発表する事になったから、宜しく頼むよ」

使者はそう言い残し、出て行った。使者がいなくなったのを確認すると、キリヤは大声で叫ぶ。

「あーっ！　なんで毎回毎回、俺があんな糞親父どもの相手しなきゃなんねーんだっ！　俺の特技はこんな事の為にあるんじゃないぞっ！」

キリヤは自分の顔の皮膚をおもむろに掴むと、それを剥がした。剥がされた後の顔には、額に大きな傷跡のある別の顔が現れる。男の名はデイスガイズ。一級兵士ナンバー5の称号を持ち、変装を特技とする為にキリヤの身代わりとしてよく働かされていた。

「外まで声が洩れますよ。気をつけて下さい」

そう言いながら部屋に入ってきたのは、糸目の優男風な一級兵士ナンバー9のランティンであった。

「だってよー。キリヤは人使い荒すぎなんだよ。自分が喋るの苦手だからって毎回毎回俺に押し付けやがってよ。マジで納得いかねー

つつの！」

「まあまあ、頼りにされてるって事で良いじゃないですか。それにしても、読死本を世界に……ですか。面白くなって来ましたね」

デイスガイズを宥めながらランテーンは細い目をさらに細くし、不適な笑みを浮かべた。

世界各地のありとあらゆる情報が集まる街インフォマ。インフォマには、世界最大級の通信設備が整っており、インフォマから世界各地へと様々な情報が発信される。そんなインフォマで、今最も熱いニュースがある。それは国家軍が全勢力を挙げて、読死本の収集に動き出したという事だった。

読死本は、この世界において噂の範疇の域を出ない代物だったが、政府の発表により読死本は実在する事が国民に知れ渡る。政府が発表した情報は次の通りだった。

- 1、読死本は全部で5冊存在する。
- 2、国家軍は全勢力を挙げて読死本の収集をしている。
- 3、読死本を発見した者には、一冊につき懸賞金一億セル（一生遊んで暮らせる金額）を授ける
- 4、読死本による呪いを解除する術を用意している
- 5、懸賞金の期限は一年とする
- 6、偽物で懸賞金を騙し取ろうとした者には、厳しい処罰を与える

莫大な懸賞金により、世界の人々の注目は読死本へと集まった。

インフォマ繁華街にある喫茶店で、信と如月はテーブルの上にイ

ンフォマ情報部から発行された新聞を広げ、読死本についてのニュース欄を読んでいた。信は読死本による呪いを解除する術を用意しているという記述に目を留める。

「ユキ、此処見てくれ。俺達助かるぞっ！」

「……はあ」

信が喜ぶ様を見て、如月は深く溜息を吐く。もしも、本当に呪いを解く術を持っているのであれば、力づくで本を奪うような真似はしない。これは、読死本を手に入れる為の嘘だと如月は考える。それよりも如月が気になったのは、期限は一年とするという部分であった。

この記述から予想出来るのは、政府の人間が読死本を読んでしまい、自分の呪いを解く為に読死本を集めようとしているのではないか、という事。今まで全く読死本に対しなんの反応も示さなかったにも関わらず、急に読死本の収集に出た事を考えるとその可能性は高い。そうになると、如月達にとってはやっかいな事になる。少なくとも一冊は政府の元に読死本がある事になり、国家軍との衝突は避けられないだろう。

「ユキ。早速政府本拠地のグラニモに行こう」

「……はあ」

如月は再び深い溜息を吐くと席から立ち上がる信を無視して、新聞を読みながら思考を働かせる。読死本の噂自体は、100年以上前から存在していたと言われている。だが、実在すると世界で認められたのは今回が初めて。何故か。読死本自体は所持者以外からは、ただの真っ白なページの本にしか見えない。（ルール【5】参照）よって、他者に読死本が本物であると証明する事は難しかった。

た。

しかし、今回は政府からの発表であり、ようやく読死本の存在が  
知れ渡る事になったと考えられる。

「でも……」

如月には、一つ腑に落ちない部分があった。一年以内に5冊の読  
死本を集めなければ死を迎えるというルールがあるにも関わらず、  
実際に読死本によって死んだ者の存在が未だに発表された事はない。  
もし、家族もしくは友人、恋人が読死本によって死を迎えたとする  
と、残された人間は読死本が本物であると認識する筈である。しか  
し、そんなニユースは過去に一つもない。何者かによって、事実を  
抹消されているのだろうか。

「おい、ユキ何してんだよ。早く行くぞ」

一旦喫茶店を出た信は如月がいない事に気づき、戻ってくる。如  
月は新聞を筒状に丸めて立ち上がると、信の顔面に向かって思い切  
り新聞を振り抜いた。心地良い破裂音が喫茶店中に響き、多くの客  
達の視線が一瞬如月達に集まるが、すぐに視線を戻しそれぞれの世  
界に戻っていく。

「いつてーなっ！ 何すんだよ！」

信は顔を擦りながら怒鳴る。そんな信に顔を寄せて耳元で小声で  
如月は言う。

「あんた馬鹿？ 本当に解呪なんてしてくれる訳ないでしょ。嘘よ、  
嘘。ちよっとは人を疑う事を覚えたらどうなの？」

「俺の名前は信だ。信じる事を」  
「あーっ！ お嬢様見つけたっ！」

信の言葉を遮り、揉める二人の間に突如現れた一人の女性。腰に二本の刀を携えた、綺麗な黒髪のパニーテールが特徴的なメイド姿の女性は如月にいきなり抱き付いた。

「か、神楽！？　なんでこんな所にあんたがいるのっ」  
「屋敷からいなくなっただお嬢様を探してたんですよ！　もう、逃がしませんからねっ！」

神楽と呼ばれた女性は、インフォマから北に位置する水の都「イロハース」の如月領主家に仕えるメイド兼用心棒であった。そして如月ユキはその如月領主家当主の娘である。

「神楽、わざわざ探しに来てくれたのに悪いけれど、私は全ての読死本を集めるまで帰れないわ。それに国家軍に狙われているしね。家に戻れば迷惑をかけてしまう」

如月は周囲に聞こえないように神楽に耳打ちをする。

「……だったら、私も手伝わせて下さい！　領主様からお嬢様を守るように言い付けられております」

真剣な眼差しで如月を射抜く神楽。如月に神楽の申し出を断る理由はなかった。それに、例え断つても無理やりにも神楽はついて来るだろうと長い付き合いの如月には容易に予想出来た。

「わかったわ。危険な旅になるけれど、宜しくね神楽」  
「はいっ！　この命に代えてもお嬢様は私が守りますっ！」

「あ、あの……」

如月と神楽の会話に入り込めず、ずっと放置されていた信が申し訳なさそうに声を掛ける。神楽は信を怪訝な表情で見つめ、如月は面倒くさそうに説明をした。神楽は如月に近づく男は信用ならないと、如月の説明を聞いても警戒を解く事はしなかった。逆に信は同じ旅仲間として迎え入れようと握手を求めるが。

「お嬢様を守るのは、私一人で十分です。貴方と馴れ合うつもりはありません」

「あ、ああ……そう」

差し出した手で自分の頭を掻き、信は如月に視線を移す。如月はやれやれといった表情で神楽を見る。

「神楽、今日はインフォマに泊まるわ。ホテルを探しておいて」

「はい、お任せ下さいっ！」

神楽はポニーテールを揺らしながら、ホテルを探しに走り去って行った。

「俺、あの子に嫌われてるのか？」

「さあ、どうかしらね」

如月は適当に返事をする、砂糖の一つも入っていないブラックコーヒーを啜る。

「お前、よくそんな苦い物飲めるな」

「あんたがお子様なんですよ」

「ぬぐ……俺だって飲めるぞ」

「そう、じゃーどうぞ」

如月は自分のコーヒーを信の前に置く。だが、信はコーヒーを見つめたまま動かない。

その姿に如月はにやりと笑い訊く。

「あらあ？ 飲めるんじゃないの？ やっぱりお子様ねー」

「いや……だって、これ飲んだら間接キスじゃ……」

信のその言葉に一瞬で如月の顔が茹蛸のように真っ赤になる。

「まあ、ユキが気にしないってんなら、いただきます」

「ちょ、ちょ、ちょ、ちょ、ちよっと待ったあ！」

コーヒーを口に運ぼうとする信の手からコーヒーを奪い取る如月。その際に中のコーヒーが少し零れ、信の手に掛かる。

「あっちいー！ な、何すんだよ！」

「う、うっさいわね！ あんたが変な事言っのが悪いんじゃないっ！」

「な、なんだよ変な事って」

「し、知らないわよ馬鹿っ！」

如月は信と目を合わせずにコーヒーを再び啜り始める。  
微妙な間が二人を支配する

「お嬢様、ホテルの予約取って来ました。早速案内します」

会話する事もなくなった所で丁度良く神楽が戻ってくる。旅の疲れを癒す為に、神楽の案内で如月と信はホテルへと向かった。



ホテルに到着すると信は感嘆の声を洩らす。神楽が案内したホテルはインフォマで最も有名で高級なホテルだった。一泊するのに、社会人の平均月収程度はかかると言われている。

「なあ、マジでこのホテルに泊まれるのか？ 俺、金ないぞ」

「生憎部屋が一つしか取れませんでしたので、ここに泊まるのは私とお嬢様だけです。貴方は野宿でもしたらいいじゃないですか」  
「……」

神楽の非情な仕打ちに言葉を失う信。さすがにそんな信を不便に思ったのか、如月が助け舟を出す。

「良いわよ、一緒の部屋で」

「お、お嬢様！？ 駄目ですよ！ 殿方と同じ部屋なんてっ！ 何があるかわかったものじゃありません！」

神楽は焦り、絶対阻止の構えを見せる。

「あら？ 神楽が私を守ってくれば問題ないんじゃないかしら？」

それは神楽の自尊心を擽る言葉だった。

「……わ、わかりました。私が全力であの獣からお嬢様をお守りします！」

「俺が獣……」

こうして無事、信は野宿を回避する事が出来た。

高級ホテルの部屋だけあって、中は広々としていた。信は普段な

らば喜ぶ所だが、神楽に心をスタボロにされて傷心していた。部屋に入ると信は喫茶店で如月としたやり取りをもう一度する。

「俺、あの子に嫌われてるのか？」

「さあ、どうかしらね。それより本を開いて、地図のページを確認して」

如月に促され、信は洪々本を開く。読死本には、1ページ目、2ページ目までルールが記載されており、3ページ目は、それぞれの読死本に個別に能力の取り扱い方法が記載されている。その後、数十ページに渡り白紙が続き、最後のページから数えて2ページ目は、世界地図が記されていた。

【8】読死本は他マスターの居場所を感知する能力を所持している。

「ルールにもある感知能力は、世界地図上に点滅している点がマスターのいる場所を示す事で間違いなさそうね。ほら、インフォマに二つの点滅する点がある。つまり私と貴方ね」

世界地図上でインフォマに位置する場所で、銀色と黄色の点滅する点が二つあった。その他に、ペイズの東に位置する大森林「ボス」に黒色の点滅反応。インフォマとプリマの南に位置する世界政府の本拠地「グラニモ」に金色の点滅反応。四つの反応が確認出来る。

「あと一つ反応が足りないのは、きっとまだ持ち主がない状態なんでしょうね」

読死本所有者にとって、感知能力が役に立たないマスターの存在しない読死本を探す事は、雲を掴むような話になってしまう。如月

達は、ただ探知出来るようになるのを願う他なかった。

次の目的地は、読死本の反応が最も近くにあるグラニモとするのが効率的ではあったが、国家軍と争うには、信・如月・神楽の三人だけでは戦力的に不安を感じた如月は、遠回りになるが大森林ボスに在るであろうマスターを仲間に加え、戦力の増強を図る事にした。

深夜24：00。雨がしとしとと降り始め、静寂な闇を雨音が支配する。一軒家の屋根に二人の二級兵士が信達が泊まっているホテルを見つめながら立っていた。

「時間だ。突入するぞ」

「了解」

## 雨と満月

空に黒い雲が集まり、雷鳴が鳴り響き雷光が走る。雨脚は次第に強さを増していき、雨音も激しさを増す。

世界でも五本の指に入ると言われるインフォマーの高級ホテル「ベシアン」。ホテルのフロントには、複数の豪華なシャンデリアと大理石で出来た光沢の美しい床、芸術的な造詣美の柱。壁には美術館を思わせる程の素晴らしき絵画が飾られている。

そのフロントに二人の二級兵士、零と迅がいた。二人は受付嬢に国家軍の紋章と一枚の写真を見せる。その写真に写っている人物それは 如月 ユキであった。すでに国家軍は如月が読死本を所持している事は調査済みであり、ずっと如月の行方を追っていた。喫茶店で如月を見つけた二人は、上層部に連絡をする事なく自分達の手柄にしようと、如月の後を追っていたのである。

受付嬢は二人が二級兵士である事を確認すると、如月達の泊まる202号室の部屋の鍵を渡した。二人は鍵を受け取り、エレベーターへと乗り込む。

「現在時刻24時10分」

「問題ない。如月嬢と本を回収後、速やかに撤退する」  
「了解」

エレベーターが目的の階に止まり、扉が開く。二人は息を潜め、202号室の扉の前に。

「24時12分、突入する」

「了解」

扉の鍵を即座に外し、扉を開け放つ。その刹那、暗闇の部屋の中から銀色の光が零の額へ向かって奔る。瞬時に零は後方へと飛び退き、それを回避する。光は闇へと消え、轟く雷の閃光が窓から射し込み零を攻撃した人物を映し出す。

銀色に光を反射させる良く手入れされた二本の刀を構え、眼光鋭く零と迅を射抜くメイド神楽の姿。すぐに二人は目の前の年端も行かぬであろう女性がかなりの腕の剣士であると見抜く。

高級ホテルベシアンの部屋は広く、202号室には防音設備の整った30畳はある寝室が二つある。それぞれには如月と信が眠っている。神楽はドアから最も近いダイニングルームでもしもの時の為にと見張りをしていた。

「こんな夜更けに訪ねてくる客人がいようとは思いませんでした。どんなご用件でしょうか？」

神楽の物言いは柔らかいが、隙など微塵もなく空気が張り詰める。

「我々は国家軍だ。如月ユキに用がある。出してはもらえないだろうか」

「お断りします」

間髪入れずに神楽は拒否する。

「そうか、ならば仕方がない　力ずくだ！」

零は部屋に大きく足を一步踏み入れ腰の鞘から刀を抜くと、神楽

へ突き出す。

神楽は瞬時に上体を反らし避け、同時に右手の刀で薙ぐ。零の体は完全なる無防備。刀は零のわき腹を抉る　　筈だった。

その刀を間一髪、迅が割り込み小剣で防ぐ。火花が散り、鉄同士がぶつかり合う鈍い音が鳴り響く。

すかさず零は突き出した刀を振り上げ、神楽を見定めて振り下ろした。

一刀の者であれば、ここで命は尽きていただろう。しかし、神楽にはもう一本の武器があった。

左手に残されたもう一本の刀で、両腕で振り下ろされた刀を力に逆らい受け止めるのではなく、

力の流れに逆らわないように受け流した。

振り下ろされた刀は右へと受け流され、その先には　　相棒である迅がいた。

勢いよく振り下ろした刀の軌道を変える事も止める事も叶わないならばと零は刀の向きを変える。

刀は迅の体にめり込み、嘔吐しながら吹き飛び部屋の壁にぶち当たり気を失った。

刀の向きを変えた事により、刃ではなく刀の後ろ側の部分、みねが当たった為致命傷には至っていない。

だが、ずっと共にしてきた相棒をやられ零は怒りに震える。

零は伝説の特級兵士キリヤに憧れ国家軍へと入り、強くなる為に血の滲むような努力をしてきた。

それでも努力だけではどうしても到達できない領域、それが一級兵士だった。

しかし、戦闘能力が足りなくとも一級兵士へ昇進出来る方法があっ

た。それは、国家への功績度を上げる事。読死本を手に入れさえすれば、一級兵士になれる筈だった。それをたった一人の女に邪魔され、あげくに相棒を傷つけられた。

本来ならば二人一組で行動し、どちらか一方が戦闘不能に陥った場合、撤退するのが定石だった。

だが、今の零に撤退の二文字はない。刀を下段に構え、神楽を睨み付ける。どちらも隙を窺い動かない。

暫くの静寂が続く。一粒の汗が零の額から頬を伝い、床へと落ちた。その一瞬　雷鳴が轟き、雷光を放ったその刻が合図。

零は力強く一步を踏み出し、下段から神楽へ向かって斬り上げる。その軌跡を神楽は二つの刀を交錯させ受け止めるが、零の斬り上げた刀は神楽の予想を上回る威力を発揮し、宙へと打ち上げられる。三メートルはある天井まで吹き飛ばされた神楽であったが、宙で体勢を変え天井に両足で着地する。上下で対面する神楽と零。

「はぁあっ！」

「うぉおっ！」

両者が雄たけびを上げる。神楽は天井を思い切り蹴り上げ零に向かって加速し、両刀を振り下ろす。

零もまた再び刀を上空から向かってくる神楽へ向けて斬り上げる。

交錯し衝突する三本の刀。

その衝撃は凄まじく、暗い部屋の中を一瞬照らす程の火花が散り、耳を劈くような衝撃音が部屋中に響き渡る。大きな反動によって、両者の体は吹き飛ばされる。零は地面に叩き付けられ、神楽は壁に

激突した。

二人の手から刀が落ちる。凄まじい衝撃に耐え切れず二人の腕の筋肉は断裂し骨にはヒビが入っていた。

もう両者とも刀を握る事は叶わない。それでも 両者は立ち上がる。

零は自分の夢と相棒の為に、神楽は主君を守る為に。

両者には、揺ぎ無い信念があった。意地があった。覚悟があった。

それを一人の男がぶち壊す。

気力だけで立ち上がりお互いに視線を交わす零と神楽。そんな二人の耳に手を叩く音が不意に聞こえてくる。開け放たれたままの扉から一人の男が拍手をしながら現れた。二人の視線が現れた男へと移る。

「見事な熱い闘いでした。良いモノを見せて貰いましたよ」

「ラ、ランティンさん……」

笑みを浮かべながら現れた男は、一級兵士ナンバー9のランティンであった。

零は上司にあたるランティンの登場に焦る。

上に報告せずに勝手に行動を起こしてしまった事に対するお咎めを恐れた。

また神楽はランティンを一目見て理解する。己を遥かに凌駕する強者である事を。

「零君、君は確か一級兵士になる事を夢みて国家軍に入ったのだね」

「は、はい……」



零に歩みながらランテーンは訊く。零は恐れながらも答える。するとランテーンは自分の一級兵士の紋章を零に差し出す。

「え？」

「零君の闘いぶりは見事でしたからね。一級兵士に昇進です」

「ほ、本当ですか！？」

「ええ 殉職での特進ですよ」

それはまさに 一閃

雷光と共にランテーンのサーベルが、零の 首を 落とした。

「あはははっ！ 汚い噴水ですねえ！」

零の首から大量の鮮血が噴出し、命の宿らぬ肉塊となり崩れ落ちる。

ランテーンは床に転がる零の髪を掴み、頭を持ち上げるとそれを壁に叩き付けた。

壁にべっとりとどす黒い血が付着する。歯が何本か折れ、床へ落ちる。

ランテーンは不適な笑みを浮かべながら、もう一度手にした頭を壁に叩き付ける。

気色の悪い何かが潰れる音が響くが、ランテーンにとってその音は心地良く感じた。

「ああ、良いです。良いですね！」

何度も、何度もランテーンは同じ行動を繰り返す。

その度にソレは変形し変色し、元の原型を留めなくなっていく。  
神楽はあまりの異様な光景に嘔吐する。血の臭いが部屋に充満していく。

その臭いもまたランテーンにとっては好みの香りだった。

「……さて、読死本とその所有者を世界政府の手土産に持っていくとしますか」

玩具にでも飽きたかのように零の頭だったモノを捨てると、ランテーンは神楽になど目もくれずに如月のいる寢室の部屋へと向かう。

神楽は動けない。体が震えて言う事を聞かない。ガチガチと歯を鳴らし、涙が溢れ出す。

主君の命が危ない。己の命に代えてでも守らなければならない。しかし、蛇に睨まれた蛙の如く身動き一つ取る事が出来なかった。

寢室の扉を開け部屋に入るランテーン。中にはアロマのラベンダーの香りが漂う。

ランテーンの嫌いな臭いだった。

大きなベッドの上には、苺のプリントが入ったパジャマ姿でクマのぬいぐるみを抱きぐっすりと眠る如月の姿がある。そして、枕元には一冊の本。その本を手に取り中を開くと、そこには何も書かれていない空白のページがあるだけだった。

「これですね」

本を懷に仕舞い込むと、のんきに眠る如月を見る。防音された部屋を一步出た先には、惨劇の光景がある。だが、如月はまだそれを知らない。ランテーンは眠る如月の頸動脈に手刀を叩き付け一瞬で

落とす。気絶した如月を抱えながら、窓を開け2階の部屋から飛び降りる。雨は弱まる事なく、更に激しさを増していた。

午前一時、信は尿意を感じベッドから起き上がり部屋を出る。そこで、異臭に気付く。ダイニングルームの電気を点けると、血だまりの中の首のない胴体、元は人の顔だった筈の潰れたモノ、そして部屋の隅で小刻みに震え頭を抱えている神楽の姿。

「な、なんだよこれ……、おいっ！ 一体何があったんだよっ！」

神楽の双肩を掴み、問い質す。神楽は震えた声で、出来事の一部始終を告げた。

「わ、私は……何も出来なかった……何もしなかった！ 私が命に代えてもお嬢様を守らなければいけなかったのにっ！ 私のせいだ……私のせいでお嬢様はっ！」

自分の非力さに腹が立ち、命を賭しても主君を守る為に動かなかった自分の卑劣さに嫌悪感を抱く。神楽は自分を責め続けた。そんな神楽の頭に信は手を置き、優しく撫でた。

「お前は悪くねえよ。悪いのは、ユキをさらった奴だ」

信は神楽にそう言うと、読死本を片手に窓を開け外へ飛び出そうとする。

「何処に……行くの？」

「そんなの決まってるだろ。仲間を助けに行く」

信の言葉が神楽には理解出来なかった。如月が連れ去られたのは、

多くの兵士が配備され厳重な警備がなされている世界政府。たったの一人で乗り込み助け出す事なんて出来る筈もない。信の言葉は自分の命を捨てに行くようなものだと思はれた。

「貴方一人に何ができるのですか……お嬢様から聞きました。貴方は空を飛ぶしか能がないと。軽々しく助けに行くなんて言わないで下さいっ！」

「言っさ」

間髪入れずに信は断言する。

「約束する。俺は必ずユキを助け出す！」

何故か自信に満ちた信の言葉を神楽は信じてしまいそうになる。期待してしまいそうになる。神楽の瞳に絶望から希望の火が灯る。

「それと俺の能力は空を飛ぶ事が出来る能力じゃないからな」

「え？」

「空を飛ぶ事も出来る能力だ。じゃ、行つて来る！」

そう言い残し、信は窓から大空へと飛び立つ。いつの間にか雨はすっかり止み、満月が姿を見せていた。

## 最強X2vs最強

強大な魔物と凶悪な賊が蔓延る森「ボス」

クインツェと朱音は、その森の中を堂々と歩いて突き進んでいた。朱音達が歩んできた道には、多くの魔物と賊が倒れている。

「いやー、どいつもこいつも手ごたえがないね。もっとわくわく出来るような戦いがしたいのにさー」。

そう思わないか、クインツェ」

「いやいや、朱音さんが強すぎるんですよ。もうこの世界に朱音さんと対等に戦える生物はいないですね」

「やつぱり？ 私強すぎるもんない。あつはつはつは」

朱音の圧倒的な力を目の当たりにしたクインツェは、金魚のフンの如く朱音に付いて行く事を決めた。

朱音さえいれば、何も怖くはない。あとは読死本を集めて呪いを解いたら、朱音も元の世界に返して

平和な生活を送ろうとクインツェは考えていた。

だが、クインツェは重大な事をすっかり忘れていた。

森を歩き始めてから数時間後。奥の方から獣の咆哮が複数響いてくる。その咆哮はすぐ様止み、代わりに足音が聞こえてきた。

「また賊でしょうかね。朱音さん、宜しく願いします」

「ああ、任せておけ」

クインツェは朱音の背後に隠れ、二つの人影を見つめる。朱音さん相手に哀れな賊達だ、などと思いつつながら哀れみの眼差しで人影を

見ていたクインツェであつたが、その表情はみるみる変化して行く事になった。何故なら、その二人は。

「あ、あ、あ、あ……朱音さん。ま、ま、ま、まずいです」

「は？ 何が？」

「あ、あの二人は……こ、国家軍の……つ、ツートップですよっ！」

朱音達の前に姿を現したのは、英雄兵キリヤと一級兵士ナンバー1の称号を持つ女、レイアであつた。

「ふーん……、つまりこの世界で一番強い奴と二番目に強い奴って事だろ？ こりゃ、楽しめそうじゃん」

「た、戦うつつもりですか！？ 今までの相手とは次元が違うんです！ に、逃げない！」

やる気満々の朱音の様子を見て、クインツェは相手の恐ろしさが全くわかっていないと嘆く。

「逃げてどうする？ 私は逃げられても、あんたは捕まるよ。最強の二人なんだろ？ そんな二人から逃げられるか？」

「うつ……そ、それは……」

「という訳で、ここは戦うしかないって事だ。まあ、私の夢だから私が勝つに決まってるって。安心しろ」

クインツェはもう期待するしかなかった。朱音が世界最強の二人すらをも凌駕する力を読死本から与えられている事を。

「やーどうも。国家軍最強のお二人さん」

朱音は二人に近づき、軽く挨拶をする。キリヤとレイアは歩みを

止め、朱音を見据える。キリヤは冷たい眼差しで、レイアは睨みつけるように。

「貴様がクルデルタを一撃で倒した女だな？ 情報と姿が一致する。間違いないな？」

レイアが言葉を紡ぐ。その問いに朱音は。

「ああ、そうだけどー？ あんたらも私とやるんでしょ？ かかつてきなよ。遊んであげるから」

今まで戦ってきた相手は、どれも朱音の足元にも及ばない相手ばかりだった。それが故に、朱音はどんな相手でも舐めてかかる癖がついていた。自分は絶対に誰にも負けない強者であると自負していた。

「そうか。ならば、お手合わせ願おうか」

レイアが構える。武器は何も持っていない。

「なあ、武器とか使わないの？」

「貴様も持っていないではないか」

「へえ……いいね」

レイアと朱音は戦闘体勢に入る。空気がピリピリと張り詰める。レイアは朱音と対峙しただけで、朱音がクルデルタを一撃で倒したという話が本当であったのだと理解する。

お互いが間合いを少しずつ詰めて行く。そして機を図ると、地面を蹴って走り出す。その刹那。

「キリヤっ！」

「うおっ！」

キリヤが剣を朱音に向かって突き出した。それはレイアと朱音の  
一対一の勝負を汚す行為。それがレイアには許せなかった。不意を  
突いたキリヤの剣は朱音の顔面に奔る。それを朱音はギリギリの所  
で避け、後方に飛び退き距離を開けた。

「キリヤっ！ 私と奴の勝負の邪魔をするとは何事」

「黙れ。二人でかからなければ、死ぬぞ」

「な……に……？ それは一体　！？」

レイアはキリヤの額から一筋の汗が流れるのを見た。いつも無表  
情で眉一つ動かさず、常に堂々としていた最強の戦士が朱音を前に  
して緊張している。

「おいっ！ その白髪のロング男！ 卑怯だぞっ！　　ったく、マ  
ジKYだなお前はっ！」

朱音は怒りを露にし、キリヤを指差して怒鳴る。肩を軽く回し、  
朱音は二人に向けて言い放つ。

「そんな卑怯な事するなら、もう二人いっぺんにかかってこいよ！  
めんどくさいっ！」

木の陰に隠れていたクインツェはそんな朱音の発言を聞いて、も  
う終わったと覚悟した。



更に数時間後、大森林「ボス」をようやく抜けて、国家軍本拠地「ペイズ」へとやって来たクインツェと朱音。

「腹減ったー！ 早速飯にしようぜ、クインツェ。この世界の飯がどんなのか楽しみだ」

「……はは、貴女という人は……自分がどれだけすごい事をしたか自覚してないのですね」

大森林「ボス」の間では、この世界で最強と謳われている二人の戦士が倒れていた。

## キャラクター紹介

新藤 信

銀の書の持ち主。能力は空を飛べる事以外は不明。  
性格は、超ポジティブ思考で正義感に溢れている。

戦闘能力：不明。

如月 ユキ

黄の書の持ち主。能力は砂や岩などを自在に操る。  
性格は、ツンデレ。それ以上でもそれ以下でもない。  
大企業の令嬢でありながら、世界政府に狙われている。

戦闘能力：E -

佐藤 朱音

黒の書によって召喚された、地球人。

召喚の際に、戦闘能力の強化という恩恵を受ける。

性格は、自分に出来ない事は何もないと思っている俺様主義者。

戦闘能力：SSS

クインツェ

黒の書の持ち主。能力は異世界の者を召喚する事が出来る。  
性格は、臆病でありお調子者。長いモノには巻かれるがモットー。

戦闘能力：一般人並み

## 零&迅

国家軍の二級兵士。読死本を手に入れての出世を狙い、如月を尾行。  
しかし、本の入手に失敗する。

戦闘能力：E

## 神楽

如月家に仕えるメイド兼用心棒。ユキの身を守る為に、現れる。  
最強の女剣士を目指して日々努力をしている。目標は、レイア。

戦闘能力：E

## カタナ

国家軍のナンバー10。新入りで、馬鹿でかい剣を武器として使用する。

性格は、無邪気で優しい青年。最初の任務でいきなり伝説の特級兵士キリヤと組まされる。

戦闘能力：B

ランティン

国家軍のナンバー9。普段は昼行灯な性格で本性を隠しているが、本来の性格は残忍で卑怯でずる賢い。デイスガイズは利用価値ありと見て、よく一緒にいる事が多い。

戦闘能力：C

クルデルタ

国家軍のナンバー8。戦闘狂であり、強さのみでのし上がった為、単純な戦闘能力だけでいえば国家軍でも三本の指に入る。が、一撃で朱音に倒される。

戦闘能力：A

???

国家軍のナンバー7

???

国家軍のナンバー6

デイスガイズ

国家軍のナンバー5。変装の名人でキラヤの身代わりを担当させられる。

めんどくさい事が嫌い、気楽に人生を楽しみたいと考えている。

戦闘能力：B

???

国家軍のナンバー4

???

国家軍のナンバー3

???

国家軍のナンバー2

レイア

国家軍のナンバー1。戦闘能力、知性ともに兼ね備えた麗しき女性兵士。

不運にも、朱音と対峙してしまいあっさり倒される。

戦闘能力：A

キリヤ

国家軍16万4千人の頂点に立つ伝説の特級兵士。無口で人付き合いが苦手。

性格は、冷酷かつ冷静。恐るべき戦闘能力を持っているが、朱音に倒される。

戦闘能力：S

## 設定紹介

プリマ：信とユキが最初に出会った街。国家軍本拠地ペイズの隣に位置することから

多くの国家兵が徘徊している。

ペイズ：国家軍本拠地のある街。腕に覚えのある人々が集まり、国家軍の門を叩く。

ボス：大森林。凶悪な獣や盗賊が徘徊する危険地帯。その中にある名もなき洞窟で

クインツェは朱音を召喚する。

インフォマ：様々な情報が世界中から集まる街。ここから読死本の存在が世界中に発信された。

イロハース：水の都。ユキの家がある。

グラニモ：世界政府の本拠地。

## 金と銀

国家軍本拠地「ペイズ」。その街にあるカフェに、世界最強となつた佐藤 朱音がいた。

「うつひゃー！ これうめえーっ！」

外カフェで朱音はこの世界の料理「ガムデムラ」に夢中だった。チーズのように伸び、大トロのように舌でとろける味わつた事のない食感と味に朱音は感動していた。

「朱音さん、僕あんまりお金持つてないんでお手柔らかにお願いしますよ」

朱音は大食いであつた。運ばれてくるガムデムラを次から次へと胃袋に収めていく。他にも料理はいくつかあつたが、朱音の口には合わなかつた。

「はぐもぐもががが（心配すんな、いざとなつたら食い逃げだ）」  
「ええ……」

そんな二人を見つめる一人の人物がいた。国家軍NO5のデイスガイズである。

デイスガイズは佐藤 朱音がキリヤとレイアを打ち負かしたという情報をすでに入手済みであつた。

国家軍一級兵士は政府にとって、大事な駒である。その為、その駒を傷つけられた場合はすぐに報復行動に出れるよう、それぞれの瞳には映像通信媒体が備わっている。一級兵士が見た映像は全て政府のとある場所に



送られているのだ。

「こちらデイスガイズー、キリヤとレイアをぶっ倒したっつー奴発見。んで、隣にいる奴がマスターか。あーめんどくせえ」

デイスガイズは通信機器で何処かへ報告をしていた。

「さて、いつちよ仕事っすつかねえ」

デイスガイズは、通信機器をしまつと地上最強の生物「佐藤 朱音」の元へと歩き出した。

デイスガイズの戦闘能力は、キリヤやレイアに遥かに及ばない。よって、朱音に勝つ事など絶対に不可能。

だが、デイスガイズの表情に緊張は一切見られない。むしろ余裕すら感じる程だ。

デイスガイズは、食事中的朱音とクインツエの目の前まで歩み立ち止まると、二つのダガーを取り出した。

「食事中悪いんだけど、読死本奪いに来た、ぜっ!」

ダガーをクインツエの顔面目掛けて奔らせる。

「ひいっ!」

急な出来事に小さな悲鳴を上げるクインツエ。そのクインツエに向かうダガーを、朱音は持っていたガムデムラで弾き飛ばした。ダガーは宙高く舞った後、テーブルの上に突き刺さる。

「もごもごこつ！（食事中に失礼な奴だなっ！）」

「あ、朱音さん！ い、一級兵士ですよっ！ や、やっちゃってくださいっ！」

即座に朱音の後ろに隠れるクインツエ。そんなクインツエを見つめ、デイスガイズはテールに突き刺さったダガーを抜きながら言う。

「お前ついてないなあ。5冊ある読死本の中で【一番使えない本】を手にしちゃったんだから」

「え？ 一体どういう……貴方何か知って」

「こついうことだっ！」

デイスガイズは朱音を完全に無視し、クインツエだけを狙いダガーを向けた。

確かに召喚した佐藤 朱音は至上最強の生物だ。だが、クインツエ本人は全くの一般人。

クインツエの命さえ消えれば、同時にマスターを失った朱音も消える。

人は誰かを守りながら戦うとなると、その戦力は本来持っているモノの十分の一にも落ちると言われている。

よって、クインツエを狙えば朱音も怖くはなく、どの読死本よりも簡単に入手が可能。

そう考えたのだが。

「もごもごこつこつこつ！（だから食事中だっつってんだろー！）」

「なっ！？」

朱音の光速の拳がデイスガイズの顔面を捉え、吹き飛ばした。

デイスガイズはたったの一撃で戦闘不能に陥った。

そもそも、朱音は誰かを守りながら戦ったとしても十分の一程度に戦力が落ちただけでは、誰にも負ける事はない。

何故なら朱音は単純にデイスガイズの十倍を遥かに越える強さを得ているのだから。

「あ、朱音さんありがとうございますー！」

「もぐもぐ（当然だ）」

だが、難はまだ去ってはいない。いつの間にか、朱音とクインツエの周囲には、国家軍兵と一級兵士数名が取り囲んでいた。

ここは、国家軍本拠地「ペイズ」。世界中の強者が集まる街である。

数時間後、とあるカフェの周囲には国家軍兵の山が出来上がっていた。

「ふああ……食事した後の運動はあんまりよくねえな。やつぱり」

たったの一人で「ペイズ」に残存する全ての国家軍兵を朱音は倒してしまった。

「一級兵士新人のカタナに、NO7の宗一、NO6のゼータに、NO5のデイスガイズ  
それからNO4のデスとNO3のユリ……、一級兵士が5人も混ざっていたんですね」

クインツェは山に転がる一級兵士達の顔を確認しつつ、苦笑いをしながら言う。

国家軍の崩壊。それは世界政府にもすぐに伝わった。

だが、今世界政府は国家軍の崩壊などに構っている余裕はなかった。世界政府には、国家軍と同等かそれ以上の戦力を備えている。にも関わらず、今世界政府はたった一人の青年によって壊滅させられようとしていた。

「な、なんなんだあいつは！ 何故だ！ 何故誰も手を出せない！」

世界政府の頂点に君臨する男、リア・クレイはたった一人の青年に慄く。

クレイの周囲には、一級兵士のランテーンと捕らえられたユキがいた。ユキは液晶に映し出されている青年の姿を見て驚きを隠せずにいた。

「ねえ、パパ。やっぱり僕が直接行くよ。だってあいつ読死本持ってるんでしょ」

そう告げるのは、クレイの一人息子であり、読死本「金の書」のマスターでもあるシレンであった。

「な、何言ってるんだ。危険だ！ 私はお前を守る為に本を集めさせているんだぞ！」

「えー、大丈夫だよ。だって僕の実力は無敵だもん。パパだって知ってるでしょ？ ほら」

そう言った刹那、シレンの姿が一瞬にして消えた。

「なっ!？」

クレイはモニターに世界政府に乗り込んできた青年と対峙するわが息子の姿を見た。

「あ、ああ……なんてことだ。頼む……神よ。息子を助けてくれ……」

若干9歳の少年、シレンと拉致されたユキを取り戻す為にやって来た青年、信。

金の書と銀の書が互いに共鳴し光を発する。

「お兄ちゃん、読死本貰うね」

「む……、こんな子供が読死本を手　!？」

「子供だからって油断していると、死ぬよ？」

それは瞬間移動か。一瞬で間合いを詰め、シレンは信の懐に入り込んでいた。

しかし、何かする訳でもなく再び一瞬で元の位置にシレンは戻る。

「これでわかったでしょ？」

「あ、ああ……」

「じゃー本気で殺し合い、始めよっか」

シレンは屈託のない笑顔を見せると、信へと襲い掛かった。

つづく

## 読死本第一巻【白の書】

国家軍一級兵士、世界中から選りすぐられた最強の兵士。

しかし、そのほとんどが史上最強の生物「佐藤 朱音」によって戦闘不能へと追いやられた。

現在残る一級兵士はたったの二人。如月 ユキをさらった冷酷で残酷な男NO9「ランティーン」と未だに姿を現さないNO2のみである。

そして、今まさにランティーンは最大のピンチを迎えていた。如月 ユキを奪い返しに来た信に世界政府が壊滅させられたら、ランティーンの立場はなくなる。地位も名誉も消え去ってしまうのだ。

「ランティーン！ 貴様の責任は重大だぞ！ わかっているのだろうか？」

クレイが声を荒げる。

「は、はい。もちろんです」

「ならば、あの男をなんとかしろ！ 息子がやられる前に！」

「わ、わかりました」

ランティーンは信のいるエリアへと向かう。その間にどう信と対峙すれば良いか

「何もせず相手を地面に伏す」能力を持った相手にどう太刀打ちできるのかを考える。

「やはり、これしかないか……」

ランテーンは懷から一冊の本を取り出す。それは紛れもなく  
読死本第一巻【白の書】であつた。

場面は変わつて、大森林「ボス」中央部。朱音に倒されたキリヤ  
とレイアが目を見ましていた。

「あの娘、化け物だつたわね。どんな攻撃も全く効かなかった。リ  
コとどっちが強いのかしら」

「……」

「あら、キリヤ。珍しく悔しそうな顔しているわね。そうよね、誰  
かに負けたのは「2度目」ですものね」

「……3度目だ」

「え、そうなの？ あの化け物とリコの他に誰に負けたのかしら」  
「……空飛ぶ男だ」

キリヤは上空を見つめる。風で森がざわめいていた。

世界政府最上階一步手前にて、信とシレンの戦闘が始まつていた。  
フロア中に風を切る音と突風が吹き荒れる。その中央には信唯一人  
が立っていた。

「へへーんだっ！ 僕の速さに全くついてこれないでしょ！？」

シレンの姿は見えないが、声だけが届く。

シレンの持つ金の書的能力、それは光の如き速さを發揮すること  
の出来る能力。誰もシレンの速さには追いつけないし、触れる事も  
出来ない。そしてシレンには、他の人間の動きがスローモーション

のように見えた。

「確かにすごい。たぶん無敵の能力だろうな、俺が相手じゃなければ」

「へんつ！ 何を負け惜しみを！」

「いや……、お前の能力は俺の能力の前では無意味なんだよ」

そう言うと、信は本を開き右腕を天に掲げた。それと同時にシレン姿があらわになる。

「な、なんで……」

シレンは動きを止め、地面に伏す。それは、今までに信と対峙した者全ての末路。

「俺の能力は重力を操る事。重力を0にして空を飛ぶ事も出来るし、自分以外の重力を通常の何倍にもして

相手の動きを封じる事もできるってわけだ」

「う、うう……」

シレンは地面に伏したまま泣く。負けたという事は死を意味する。またモニターを見ていたクレイもわが息子の敗北に絶望していた。

「安心しろよ。お前も助けてやるから」

「え？」

信は早々にその場を後にする。シレンの持つ読死本を奪う事もなく。



一方その頃、ランティンは白の書を開いていた。偶然手に入れた、白の書。ランティンは、読死本を読めば一年で死に至るというルールを知っていた為に今まで、読まずに隠し持っていた。だが、それも終わり。

自分の立場が危うくなり、頼れるのは読死本だけとなった。

「フ、フフ……だ、大丈夫だ。すでに此处には四つの読死本が揃っているじゃないか。

残る一冊を一年以内に集める事など容易い事だ。さあ、どんな能力を与えてくれる？」

## 【Foreword】

貴方の余命はあと一年となりました。

この本【読死本】第一巻を手にとって頂きありがとうございます。読死本は読んで字の如く、読めば死ぬ本です。ですがご安心下さい。猶予は一年間あります。

読死本のルールに従い目標を達成出来た場合に限り、貴方の命は助かります。

しっかりと読死本に目を通し、熟読し、自分の命をお守り下さい。

【It is a rule of the book to die when reading】

ルールを守り、明るい未来を手に入れましょう。

【1】本を読んでから一年以内に残りの読死本四冊を手に入れましょう。

それが唯一死から逃れる方法です。

【2】残りの四冊はそれぞれ銀の書（第二巻）黄の書（第三巻）黒の書（第四巻）金の書（第五巻）となります。

【3】本書の能力「他マスター権限の破棄」は絶大な為、24時間に一回の使用制限を定めてあります。

【4】それぞれの読死本には特殊能力が備わっています。

【5】読死本の持ち主（以後マスターと呼ぶ）が存在している間他者が読んでも真つ白な本にしか見えない。

【6】読死本はマスターがいない状態で手に入れなければならない。持ち主不在の読死本を集めなければならない。

【7】24：00～1：00の1時間は読死本はただの本と化す。その為能力は使えなくなる。

【8】読死本は他マスターの居場所を探知する能力を有している。

【9】読死本の破棄は不可能。

【P o s t s c r i p t】

それでは、命をかけたゲームスタートです。

読死本を読みながらランティンは、不気味な笑みを浮かべた。ランティンが注視する、読死本第一巻「白の書」の能力が詳しく書

かれたページ。

### 【他マスター権限の破棄】

【1】この能力を使用した他マスターは24時間、マスター権限を失い能力も封印される。

【2】権限を失ったマスターは24時間後に新たに読死本を読まない限り、権限は戻らない。

しかし、死の呪いから逃れる事は不可能。

【3】効果が絶大な為、使用は24時間に一回限りという制限付き。

ランティンは踵を返し、如月 ユキの元へと戻る。能力の効果を確かめる為に。

信が世界政府に乗り込んでから一時間後、世界政府の前に佐藤朱音とクインツェは立っていた。

「この中に全ての読死本が揃っていますね」

クインツェは読死本のマスター探知能力を使って、この場所を突き止めた。

「じゃー、もうすぐエンディングで夢は終わりっぽいな！」

役者は揃った。

読死本第一巻【白の書】（後書き）

次回投稿は少しお時間を下さい。すいません。

### 3 番目のルール

「読死本に書かれているルールって本当なのかな」

読死本を読みながら、アヤカは言う。信はルールを疑うなんて考えもしていなかった為に驚きを隠せずにした。

「アヤカ！ そうだよ！ 嘘かもしれない！ 一年経ってもアヤカは大丈夫かもしれないんだ！」

一縷の望みが芽生えた。しかし

ごめんね、信君

「アヤカっ！」

さようなら

窓辺から光が射し込み、薄暗い部屋の中で埃が輝きを持って舞う。信と呼ばれた青年の手の中で一人の女性が眠りにつく。

「アヤ　っ！」

その刹那、アヤカの体が　消滅した。

「……え？」

信は啞然として自分の両手を見つめる。そして　。

「俺、何してたんだ？ あれ？ なんで俺、泣いてるんだよ……訳わからん」

信は涙を拭い辺りを見回す。此処が信の部屋である事は間違いない。

しかし、今まで何をしていたのか記憶がなかった。

アヤカの存在は世界に存在していた痕跡全てが消え、なかった事になった。

「ねえ、人が死ぬ時っていつだと思っ？」

「ん？ 寿命が尽きた時だろ？」

「うっん、自分の存在を誰からも忘れ去られてしまった時だよ」

世界政府最上階。ランティンは如月 ユキで能力を試そうと考えたが、ふと思いとどまる。

マスター権限の破棄には、24時間という制約がある。今使えば、信に勝つ事は不可能。

一か八かの成功にかけるしかなかった。

だが、ランティンは知らない。例え、信を無力化出来たとしても、そのあとには世界最強の生物、佐藤 朱音がすぐ傍まで迫っている事を。

「あれ？ なんか警備兵達が全滅してますね」

世界政府に乗り込んだクインツェ達。だが、そこには戦闘不能に

陥った者達が転がっていた。二人はすんなりと中に入る。信の一時  
間に到着した二人であつたが、誰と戦闘する事もなく奥へと進め  
た為

二人は出会った。

対峙する信と朱音。どちらも特級兵士キリヤを打ち負かした人間。  
果たして、どちらの方が強いのか。

「か……」

朱音は信の姿を確認すると、体を震わせ鳥肌を立てた。そのさま  
を見てクインツェは信に恐怖を覚える。

今までどんな相手でも余裕を保っていた朱音が明らかに動揺してい  
る。強者は相手の力量を一目で見抜くことが  
出来るという。つまり、朱音は信が強者だと気づき初めて恐れを  
。

「か、かつこいいい！」

「え？」

「へ？」

突然の朱音の「かつこいいい」発言に、信とクインツェはまぬけな  
声を出してしまった。

顔を赤らめ、今まで見せたことのない女の表情を露わにしている。

「つ、付き合つて下さい！」

そして突然の告白。が、しかし

「丁度良い！ 本を持つ者が二人揃っている！ これならば一回の使用で二人を無力化できる！」

そこに現れたのは、全く空気を読んでいないランティンであった。ランティンはすぐに本を開き

「お前らの人生もここでおヴぁーがおがえおあがー！」

その刹那、ランティンは吹き飛んでいた。朱音の光速のこぶしによつて。

「今いいとこなんだから、邪魔しないでっ！」

朱音は興奮していた為に、手加減を忘れた。そしてランティンは、一級兵士であるが戦闘能力は他の一級兵士には遠く及ばない。よつて、ランティンは朱音の一撃によつて

死亡した。

吹き飛んだ際にランティンの持っていた本が宙を舞い、信の手元へと落ちた。

信は何気にその本のページを開き

「読んじゃ駄目だっ！」

クインツェが叫んだ。だが、すでに信の目には読死本一巻のページが映り込んでいた。



読死本第四巻「黒の書」に記載されている三番目のルール。  
そこには、こう記されている。

・マスターのまだ存在していない読死本を読めば、読んだ本人は  
マスターと認識され特殊能力を

与えられる。しかし、マスターのいない読死本を二冊以上読ん  
ではならない。万が一読んだその時は

全ての読死本のマスターはこの世界から消失する。

## 学園生活！

多くの恵みを受けた星「地球」

多くの生物が誕生し、進化していった。

そして人間が生まれ、科学が発展し、地球は姿を変えていく。

2011年、東京。

ある住宅街の一軒家に住む一人の青年。名前は新藤 信。年は17歳。

空色学園二年の生徒だ。

目覚ましが鳴り響き、信は目を覚ます。

「寝たりねえ……でも、行かなきゃ……ぐう……」

目覚ましを止め、ゆっくりと布団に潜り込む。

「こらっ！ 起きなさいっ！」

信の頭にチョップがさく裂する。

「うっ……なんだあ？」

信が頭をあげてみると、そこには幼馴染の「あやか」がいた。すぐ隣の家で、屋根伝いに信の部屋に忍び込みよく信を起こしに来てくれる可愛い幼馴染だ。

「おまえ、年頃の男の部屋に勝手に入ってくるのは、もうやめてく

れよ」

「何言ってるの。信がちゃんと起きないからでしょ。私はおばさんから信をよろしくって頼まれているんだから」

「なんだそりゃ」

頭をぽりぽりと搔いてしぶしぶ信は起き上がる。

「おい」

「何？」

「今から着替えるんだけど、俺の裸そんなにみたいのか？」

「！？　ば、バカっ！」

あやかはその場からそそくさと退散する。

「ふああゝ、眠い」

大きく欠伸をしながら信は学校へ行く支度をする。

母の作った軽い朝食を済ませ、家を出るとあやかともう一人女の子が待っていた。

「おっす、信！　今日も冴えない顔してんな！」

そう元気に挨拶したのは、もう一人の幼馴染「佐藤　朱音」だった。

三人は昔から一緒に同じ時を過ごしてきた。

「なあなあ。知ってるか？　今日さ、転校生がうちのクラスに来るらしいぜ」

朱音はわくわくした顔で言う。信とあやかは、転校生が来るとい

うのは、初耳だった為に詳しく話を聞く。

「いや、詳しくは知らないけど」

「なんだよー。男か女かぐらい調べとけよなー」

「信は女の方がうれしいもんな」

「は！？ 女になんか興味ねーし！」

少し顔を赤らめて信は反論する。そんな姿をみて朱音はにやにやとして、次の言葉を放った。

「あやかちゃんの事はどうなんだよ」

「は？」

「え……」

その言葉に、信とあやかの歩みが止まる。

「好きなんだろうーあやかちゃんのこと。付き合っちゃえよー」

「ちょ、ちよつと朱音ちゃん。何言ってるの！」

「は、は？ きよ、興味ねえし全然！」

信は必至に否定する。その言葉を聞いたあやかの顔は悲しそうだった。

「何きよどつてんの？ やっぱり好きなんじゃん！」

「も、もういいよ朱音ちゃん」

あやかが止めに入る。それでも朱音は止めようとせず

「それじゃーあとは若いお二人に任せて私は退散しましょうかね。じゃー先行ってるよー」

朱音は走り去ってしまふ。あとに残される気まずい雰囲気の二人、それを繕うように、あやかは話し始める。

「もう、朱音は何言ってるだろうねー。私たちが付き合つとかそんなのあるわけないのにね」

「ああ、当たり前だ。天地がひっくり返ってもあり得ない話だ」

「そ、そうだよね……」

あやかは悲しそうな表情を浮かべた。

学校に到着し、それぞれが席に着く。一番後ろの窓際の席には、信。その隣には、朱音。

そして一番前の真ん中の席には、あやかがいた。

「で、どうだったんだよ。あの後、仲良くやれたのかよ、おいー」

にやにやしながら、朱音が信に訊く。だが、信は窓の外の校庭を見つめながら朱音を無視する。

こういう時の朱音はしつこく、うざいと感じていた信は関わらないようにしようと決めていた。

「なんだよー。相手してくれよー。寂しいじゃんかよー」

「……」

「ちえーっ！ つまんねえの」

朱音はふてくされたかのように、机に突っ伏した。

「ん」

校庭を何気なく見つめていると、一人の女子高校生が校門から入ってくるのが見えた。

顔に見覚えはなかった。あれが転校生だろうかと思えながら見ていると、その生徒は二階の窓際から見ていた信に顔を上げて視線を合わせた。

「う……」

信は気まづくなる。が、即座に視線をそらす事も出来なかった。すると生徒は鞆から一冊の本を取り出し、掲げた。

「今度は私が助ける番だから！」

生徒は、信に向かって大声でそんな言葉を叫んだ。

つづく

おめでとう！

楽しい学園生活。夢のような学園生活。

俺はそんな学園生活を満喫していた筈だ。なのに、何処かで「このままでいいのか」

という不安が心を支配していた。

本当にこのままでいいのか？

目覚ましがなり響き、ベッドから起き上がると普段通りに準備を済ませ

幼馴染と共に学校へ行く。

そうそう、転校生がいたがあれは別のクラスだった。あの時の転校生の発言は気になったが

特に何も接触はない。もしかしたら、俺に言った訳ではないのかもしれない。

勘違いか、恥ずかしい。

時は容赦なく過ぎていく。

学校を卒業し、社会人になって結婚して家庭を築き、老いていく。

65歳になったころ、私は自宅の倉庫から一冊の本を見つけた。表紙は銀色で、タイトルなどは何も書いていない。ただ、何か懐かしい感じがした。

「……はは」

私は本をそつと戻しながら笑みを浮かべた。

知らない方がいい事だってある。きっとこの本は読まない方がいい。直感で私は思った。

「さて、孫の顔でも見て来よう」

私は倉庫の扉を閉め、孫の元へと向かった。

私の人生は決して悪いものではなかった。

これでいいのだ。

完



## おめでとう！（後書き）

無事完結できました。ありがとうございました。

ここまで頑張ってこれたのも、みなさんのアクセス数のおかげです。  
それだけを気力の元に頑張ってきました。  
それではさようなら。おめでとう。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6292u/>

---

寿命一年戦記

2011年9月12日12時49分発行